HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリシタン版の日本語と印刷術についての研究［全文の要約］
Author(s)	白井, 純
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7145号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82998
Type	doctoral thesis
File Information	Jun_Shirai_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専門分野の名称：博士（文学）　　氏名：　白　井　　純

学位論文題名
キリシタン版の日本語と印刷術についての研究

本論は、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて日本で出版されたキリシタン版の日本語について、文語体の宗教文献にみられる特殊な文法と、仮名と漢字を用いる国字本の表記およびそれらの活字を用いた印刷術を中心として考察したものである。「**A.研究篇**」は考察の本体であり 1〜8 部に分かれている。「**B.資料篇**」は前期国字本 4.5 万字、後期国字本 52 万字、木活字版『こんてむつすむん地』7 万字の切り抜き文字画像の観察よる、3 種類の活字版についての字種水準での集計表と、活字印影の特徴から分類した字形水準でのキリシタン版国字本の文字総索引から構成される。

「**A.研究篇**」冒頭の「**1. 総論**」では、「**1-1. キリシタン版の刊行と日本語学習**」として研究史を概観し、キリシタン版の概要を紹介したうえで、本論に取り上げた新しい知見について宣教師の日本語学習という点から説明した。キリシタン版の日本語には外国人による日本語学習とその成果に基づく日本語表現という特殊事情があるため、当代語として規範性が高い日本語であることは従来から指摘されてきたが、特にロドリゲスの文法書にみられるように日本語学習の過程で日本語の実態に対する批判的態度を獲得し、日本人にはなかった合理的な発想によって日本語の整理を行い、それを文法と表記に及ぼしたという特徴があった。

「**2. 文法研究**」では、キリシタン版が当代の日本語そのものの再現を目指すのではなく、当代の日本語文法の一部に独自の変化を加え、日本語として理解不能にならない範囲での改良を行ったことに注目した。口語体の文法に比べ、キリシタン版の文語文には一見すると特徴が無いようであり、文語文には当代の日本側資料も豊富であることから研究上も注目されることが少なかったが、敬語法を中心として独自の特徴を見出すことができた。日本語の敬語法はジョアン・ロドリゲスの『日本小文典』（1620 年マカオ刊）の「日本語の概観」の 5 番目にも取り上げられた日本語の特徴であり、ヨーロッパの言語との相違が大きく、且つ、宣教活動には不可欠な要素でもあった。「**2-1. キリシタン版における与格助詞「に」と「へ」**」では、与格助詞「へ」に上位待遇性があることを指摘した。「へ」は名詞「辺」が文法化した語であるという性質から対象を漠然と表す意味を持ち、「殿」など場所を表すことでそれに関連する高位の人的対象を表す用法はあるものの、神や聖人などの人的対象に明確な待遇性のもとで運用したのはキリシタン版の特徴である。「**2-2. キリシタン版の助詞「より」「から」の主格標示機能**」はロドリゲス『日本大文典』でも主格の助辞として挙がる助詞「より」が、神や聖人などの高位者から人間などの低位者に向けた構文の主格に現れることを明らかにした。この時代の主格助詞は未発達で助詞を用いない裸の名詞が主格で差し支えないが、助詞「よ

り」を積極的に主格に用いた例は日本側文献にみられない。単なる主格ではなく待遇性を帯びる点は格助詞「へ」と共通する特徴となっている。「**2-3. キリシタン版における使役と尊敬**」は使役と尊敬の意味をもつ助動詞「さす」について、キリシタン版がもっぱら使役の意味に固定して用いることを明らかにした。使役と尊敬の区別は文脈を考慮しても判別が難しい文法的課題だが、キリシタン版はこうした日本語文法が構造的に抱える問題について、敬語法の整理によって助動詞「さす」の使用範囲を意図的に狭め、使役表現として明確化するという合理性を備えている。「**2-4. キリシタン版の「ものなり」「ことなり」表現**」は、キリシタン版にみられる「動詞＋ものなり」「動詞＋ことなり」構文に注目し、「もの」「こと」が「A は B なり」構文の主部 A の内容に応じて使い分けられること、形式名詞「もの」は待遇性の低い名詞「者」の意味を残すため神や聖人など高い待遇性を備える対象が主部 A となる構文には「ものなり」構文が現れにくいことを指摘した。キリシタン版で多くみられる動詞述語の敬語法について「**2-5. キリシタン版『サントスの御作業』の上位待遇表現**」および「**2-6. キリシタン版における上位待遇表現の変遷**」で取り上げた。キリシタン版では敬語動詞や敬語補助動詞、助動詞を用いた敬語法が整理されており、待遇の対象に応じて敬語法が階層化されている。日本語の敬語法では「公尊敬」として高位者を助動詞「らる」で待遇することが行われているが、キリシタン版にこうした特徴はみられない。また、日本側の文献で頻用される二重敬語「させ給ふ」「させらる」をあまり用いず、「給ふ」「らる」として単純且つ明確な体系としたのは、キリシタン版独自の特徴である。このような目的意識が明確な敬語法の整理がみられる一方で、理解が不十分となった例もある。「**2-7. 『スピリツアル修行』国字写本の「対す」**」は動詞「対す」周辺での不規則な敬語表現を取り上げたものだが、写本の事例であり活字本とは区別して扱うべきだろう。「**2-8. キリシタン版における漢語サ変動詞の承接と敬語表現**」は漢語に助動詞「させらる」が直接接続する例を取り上げ、キリシタン版の敬語法に反する特徴について紹介したが、サ変動詞の理解が不十分だった可能性がある。

「**3. 表記研究**」では仮名用字法とローマ字本の疑問符の用法を取り上げた。キリシタン版国字本では特に後期国字本で規則的に変体仮名が用いられており、語頭や助詞に標識となる特定の変体仮名が集中することによって語境界を明確化させ、可読性の向上を図っている。このことは日本側文献にもみられる特徴だがキリシタン版のそれはより整然としており、「6. 印刷術研究」で取り上げたように活字の制作や運用とも密接に連動する表記上の特徴であることは、本論が特に強調したい部分である。「**3-1. キリシタン版の仮名用字法**」では後期国字本にみられる仮名用字法を取り上げ、とくに格助詞や同じ仮名の連続で組織的な仮名用字法がみられることを指摘した。「**3-2. キリシタン版前期国字本の仮名用字法**」では語頭と非語頭の仮名用字法が語種によって異なること、より後に印刷された文献で仮名用字法が鮮明に現れるが助詞の仮名用字法には明確な特徴がなく、その点で後期国字本と異なることを指摘した。「**3-3. キリシタン版の原語にみる仮名用字法の意識**」では、仮名用字法がどの程度意識的な表記法だったかを探るため原語の仮名用字法に注目した。語頭に集中する特定の字母が語の境界を標示する機能を持つのなら、キリシタン版に独特な原語の仮名用字法にも同じ特徴が現れると考えられるが、原語にはそうした規則的な仮名用字法がみられなかった。従って仮名用字法は表記上の習慣による部分が大きく、語の境界を表す機能まで明確に意識されていたとは考えがたいと結論した。「**3-4. キリシタン版ローマ字日本語文の分節表示と疑問符**」ではロ

ーマ字本の疑問符や句読点を取り上げた。キリシタン版の疑問文を引用する「と」の後ろに疑問符が置かれた例は分節記号としての機能を優先させたものであり、欧文では起こらない問題だが、それを文法の異なる日本語文に適用したため齟齬が生じたと考えた。

「**4. 定訓研究**」は「5. 落葉集研究」とも関連するが、漢字辞書『落葉集』の定訓に基づく表記が後期国字本の表記の基盤となっていることを改めて確認しつつ、文献の用例においては和語（和訓）→漢字という同訓異字の表記に定訓よりも更に絞り込まれた表記規範が存在したことを明らかにした。「**4-1. 辞書と文献の比較に基づく定訓論の再検討**」では、それぞれの漢字に最もよく結びつく和訓（定訓）がキリシタン版国字本と漢字辞書『落葉集』で強い関連を持っていることを、『落葉集』の同訓異字と宗教書『ぎやどぺかどる』での用例を比較して確認した。定訓は漢字から和訓、和語から漢字表記の双方での結びつきに関与し、相互に複雑に絡み合う体系性を持つが、『落葉集』と『ぎやどぺかどる』の漢字表記だけでなく、日本語辞書『日葡辞書』では漢字表記を導くための注釈としても機能しており、キリシタン版の漢字整理として共通性を持たせた合理的な設計になっている。『ぎやどぺかどる』では和語から漢字表記の方向では定訓に従った表記のなかにも優先順位があり表記の安定性に貢献しており、定訓の双方向性を考える際には辞書だけでなく文献の用例の分析が重要であることを示している。「**4-2. 『落葉集』定訓からみた『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の訓読**」では槇尾平等心王院で出版された古活字版 2 種への訓読の書き込み、およびその覆刻整版に印刷された訓読を取り上げ、キリシタン『落葉集』の定訓と比較した。定訓内にある和訓は一々表記されないが、定訓で読まない場合には和訓全体を書き込むことが多く、定訓の有効性がおおむね確認できる。

「**5. 『落葉集』研究**」では日本語学習者の合理的発想が色濃く反映された『落葉集』についてｓ、その概要と意義を改めて確認すると共に、掲出字種と語彙、部首の認識を中心とする精密な資料研究を行った。「**5-1. 『落葉集』の和訓**」では辞書内の「本篇」「色葉字集」「小玉篇」で共通する定訓の安定性が、漢字と和訓の結びつきの定義であると共に辞書内での相互検索可能な手段としても機能しており、合理的な設計となっていることを示した。「**5-2. 『落葉集』の掲出字種**」では掲載される字種が「本篇」「色葉字集（単漢字部分)」「色葉字集（熟字訓部分)」「小玉篇」でどの程度共有されるかを探り、漢字と語彙の両面に対応する 2,160 字種あまりの漢字集合の特徴から、字種選択の理由となる漢字の常用性のあり方を検討した。「**5-3. 『落葉集』本篇の掲載語彙**」では漢語を掲載する「本篇」が形式上類似する古本節用集からの引用によって成立したとする先行研究を修正し、常用性の高い漢字を選び出し、それを繰り返し使用することで構成可能な漢語を列挙したと考えた。このことは「6. 印刷術研究」に検討したように『落葉集』が金属活字によって印刷されたことと密接に関係しており、活字制作に必要な字種選別を経た漢字集合が『落葉集』各部を構成する漢字の本質であると結論した。「**5-4. 『落葉集』の字体認識**」では、「小玉篇」の部首分類の方法を分析した。「小玉篇」は行草体の見た目の特徴によって複数の部首に分類し、また、特定の部首に所属しない字種を集めた「類少字」という特殊な部首を置くなど日本や中国の漢字辞書にみられない独創的な特徴を持つが、その背景にはどの部分を優先的に部首として扱うかという点で楷書体の伝統的な部首分類の方法も利用されており、新旧の分類方法の長所を活かした無駄のない合理的な設計になっていることを明らかにした。

「**6. 印刷術研究**」では、「3. 表記研究」「4. 定訓研究」「5. 『落葉集』研究」で説明したキリシタ

ン版の表記上の特徴が、西洋式活字印刷術の日本語への応用という技術的特徴によって支えられており、印刷術研究が単なる技術論ではなく、キリシタン版の日本語のあり方に密接にかかわる問題であることを実証した。そのための方法として、「B. 資料篇」に具体例を示したように、キリシタン版国字本の全活字印影の切り出し画像に基づく仮名と漢字を中心とする日本語表記を分析し、その成果をまとめている。「**6-1. 『落葉集』と活字印刷**」は「5. 落葉集研究」とも関連し、漢字辞書を印刷する活字がどのように設計され運用されていたのかを印刷術の点から検討した。活字印刷では少なくとも同一版面を組版できるだけの活字を必要とし、それによって必要な在庫数を推定することができる。『落葉集』の各字種の必要数は大小様々だが、漢字辞書という性格上概して少なく、活字制作のコストを考慮しそれに見合った在庫数を確保するに留まったと推定した。「**6-2. キリシタン版後期国字本のタイポグラフィー**」では、後期国字本全体での活字運用の実態を活字の増産状況から検討した。『落葉集』はキリシタン版に必要な常用性の高い漢字により構成されており、翻訳文献で語や表記を自由に選択できる『ぎやどぺかどる』はその理想的な運用である。しかし日本の古典である『和漢朗詠集』『太平記』には『落葉集』に掲載のない漢字が多く、字種と在庫の不足による非量産型活字の追加も頻発する。この状況をキリシタン版の漢字整理の崩壊とみることもできるが、印刷しようとする文献の文脈に大きく依存せざるを得ない字種と在庫数の管理は難しい課題であり、キリシタン語学の水準からみて当初から十分に予測可能であったと考えられる。従って、量産型金属活字と、木活字を含む非量産型活字のハイブリッド印刷が、キリシタン版の印刷術が当初から想定していた日本語表記への合理的な対応方法だったと結論した。「**6-3. キリシタン版前期国字本の活字**」では前期国字本の仮名と漢字の活字運用の実態を明らかにした。これらの活字がヨーロッパ製であることが近年明らかになったが、既成活字への再加工で不足活字を補う方法は新たな活字鋳造がなかったことを意味しており、これと矛盾しない。「**6-4. キリシタン版の連綿活字**」では後期国字本の仮名の連綿活字を取り上げ、どのような文字の連続に連綿活字を用意したのかを、連綿による語境界標示と関連させて分析した。キリシタン版後期国字本の連綿活字は頻度の高い形態素に優先的に対応するが、同じ文字列であっても自立語の開始位置を跨ぐ位置では全く使用しておらず、語の単位を意識して可読性を向上させる機能的な運用があったことは明らかである。「**6-5. 原田版『こんてむつすむん地』の版式**」では、京都で印刷された原田版は活字形状こそキリシタン版に酷似するが、連綿活字の運用面でキリシタン版後期国字本に似て異なる特徴をもつので、キリシタン版とは異なる古活字版として位置づけるのが適切であると結論した。「**6-6. 『ひですの経』の連綿活字からみた活字の材質と製法**」では一部の連綿活字にみられる傷の特徴から、キリシタン版後期国字本の活字が西洋式印刷術の典型である金属母型ではなく、砂もしくは粘土鋳型に基づく可能性を提示した。非金属母型はグーテンベルク活字や駿河版銅活字にも類例があるので、日本で制作されたと思われる後期国字本の活字についても検討が必要である。「**6-7. 用紙と印刷の特徴からみたヘルツォーク・アウグスト図書館蔵『コンテムツスムンヂ』**」は新出資料の原本調査に基づく報告で、印刷術と印刷用紙の特徴を他のキリシタン版の原本調査と比較して明らかにした。

「**7. 『ひですの経』研究**」では、2009 年にボストンで発見された孤本『ひですの経』の原本調査の知見に基づき、日本語学、文献学、キリシタン語学の観点から分析を行った。キリシタン版は高い規範性を持ち、辞書と文献が密接にかかわるキリシタン語学としての体系性を持つが、『ひですの経』

にはそうした特徴が失われ規範性が低下している。本章では『ひですの経』の特徴がキリシタン関係の写本に類似することを根拠として、イエズス会の日本語は『ひですの経』や写本の規範性の水準であり、他の印刷された国字本にみられる高い規範性は、活字印刷をする際の校正によって整えられたと考えた。「**7-1. キリシタン版国字本としての『ひですの経』**」では同書の特徴を概観し、語彙と表記にはキリシタン版の規範性に反する例が多いことを指摘した。「**7-2. 『ひですの経』からみたキリシタン版国字本の規範性**」では『ひですの経』の具体例に基づき、キリシタン版の規範性のあり方について再検討を加えた。キリシタンの写本には印刷本にみられない語彙や表記が多いが、『ひですの経』本文にはそれと共通する特徴が多い。原本の表紙補強紙として発見された断簡の用語がむしろキリシタン版として適切な規範性を備えていることは示唆的であり、キリシタン版は写本や『ひですの経』本文のような日本語を活字印刷段階での校正によって修正し統一することで高い規範性を実現していたと考えられる。『ひですの経』はいわば「印刷された写本」であり、校正の不備によって写本と共通した特徴が現れた印刷本である。「**7-3. 『ひですの経』からみた『妙貞問答』**」では国字本『ひですの経』の翻訳が刊行より大幅に早く行われていた可能性に立ち、両書の日本語の特徴やキリスト教教義の理解水準が大きく異なることから、『妙貞問答』の著者、不干ハビアンが『ひですの経』編集にかかわった可能性は低いことを指摘した。

「**8. 関連研究**」では、1〜7 章に関連するその他の研究をまとめた。本論著者が発見したリオ本『日葡辞書』は現存が確認できる 4 冊目の『日葡辞書』であり、中南米で初めて発見されたキリシタン版としても大きな価値がある。また、キリシタン版に影響を与えた同時代の日本側の古辞書や古活字版、近世末期の木活字による藩版を取り上げ、キリシタン版の印刷術との比較を行った。「**8-1. ブラジル国立図書館の『日葡辞書』**」および「**8-2. Background and significance of the Rio copy of the Vocabulario**」では、2019 年 9 月にブラジル国立図書館で中南米初のキリシタン版として発見したリオ本『日葡辞書』の概要と新発見の経緯を紹介した。リオ本は允許状・認可状と補遺を欠く点でパリ本に共通するが、パリ本が異植字版となる Tt 折についてはパリ本以外の諸本に一致しており、リオ本がパリ本と同じ初期の印刷・製本によると結論することはできない。「**8-3. 『易林本節用集』と字体注記**」では、キリシタン版と同時期に出版された日本の古辞書を取り上げ、辞書内での異体字の掲載方針について分析し、異体字を示すことには積極的であるものの、異体字間での優先性は特に意識されていないことを指摘した。「**8-4. 松本藩版『兵要録』の活字本と整版**」では、松本藩が出版した木活字本『兵要録』および『整版』の各数種を比較し、不安定な本文に対して木活字本は調整段階での藩校教育向けドラフト印刷であり、活字を入れ替えることで迅速に本文の修正と出版を行っていたこと、整版は確定した本文を世に頒布する目的で出版されたことを明らかにした。整版が優位な時代での活字本のあり方として注目すべき事例であり、活字印刷を優先したキリシタン版とは対照的である。「**8-5. 古活字本『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の版式**」では、槇尾平等心王院で出版された古活字版『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』の木活字の回転襲用の方法を具体例に基づき分析し、ある程度の間隔を開けて再利用されることを確認した。「**8-6. 槇尾平等心王院の活字回転襲用**」では、槇尾平等心王院で出版された『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』と『般若波羅蜜多心經疏』を比較し、活字の回転襲用の類似点と相違点に基づいて分析し、古活字版の印刷技法の事例として検討を加えた。

本論では以上のような研究を行うにあたって、キリシタン版国字本の全本文をテキスト化し、活

字影印の形状水準で区別した。「**B.資料篇**」にはその資料に基づき、後期国字本の字種別の集計と、活字別の全使用例の索引をまとめた。